

代表委員就任のご挨拶

巻頭言

令和5年度特許庁技術懇話会 代表委員 磯貝 香苗



令和5年度の代表委員を務めさせていただきます、磯貝香苗と申します。

伝統ある特技懇の活動に携わる機会をいただき、大変光栄に存じます。至らぬ点が多々あるかと存じますが、1年間どうぞ宜しくお願い致します。

この巻頭言の原稿を書いている今、千鳥ヶ淵の桜は満開です。今朝の地下鉄では、海外からの観光客が満員電車の風景をスマホで録画をしている場面に出会いました。昼下がりには、卒業式帰りの袴姿の女子学生を見掛けましたし、ネットニュースでは就活最盛期を迎えつつあるようです。経済活動、人々の交流、そして日常生活が、徐々に戻って来ていることを実感します。

3年前の令和2年3月末、コロナ感染の広がりからロックダウン導入が検討されるなか、当時六本木グラントタワーにいた私は、審査室でオンライン会議のやり方を練習していました。どうにかこうにかしてベテランも若手も全員会議アプリに繋げるようになったと思ったら、ほどなくロックダウン。審査室全員で手分けをして自宅で審査可能な案件を掻き集めては持ち帰り、ロックダウン期間中の案件処理や審査官補の指導体制に右往左往したことを思い出します。そこから、東日本大震災以来の大変な状態の審査室を、2年ほど経験することとなりました。

コロナ1年目と、2、3年目では各審査室の状況も随分と異なっていたかと思いますが、ワクチン接種が普及する前の1年目の審査室であっても、大きな混乱

なく、粛々と業務のオンライン化が進みました。同僚や同期と直接対面で会うことができず、それがいつまで続くか予測がつかない、という経験したことのない事態に、困惑と不安で押し潰されそうな気持ちを抱えて過ごす日々でもありました。そのような状況の下にあっても、審査部ポータルサイト等では、部を超えた様々な審査官からの改善提案が掲示板に掲載され、審査室内ではオンラインであっても互いに励まし合う声を掛け合っており、その声を頼りに全力で走っていたら、気がついたら次の春になっていたように記憶しています。感染の波はその後何度も寄せてはかえすを繰り返し、業務の効率化が更に追求される一方で、オンラインだからこそ出来る活動が活性化され、リアルとオンラインの使い分け、といった観点も議論されるようになりました。

この一連の流れを体験し、人々の前向きな力が、私達の背中を押し、前に進む力を与えてくれることを実感しました。そして、今、ようやく人々の直接交流が復調しつつあることを大変嬉しく思います。

私達は、入庁後、指導官に導かれ、その後は担当分野、担当部署、任される役割に応じて様々な経験を積み、沢山の人が育てられて審査官・審判官として醸成していきます。特技懇が、この職場文化の伝承に一役も二役も買って来たことを思うと、責任の重さに身の引き締まる想いです。常任委員会のメンバーと共に、初心にかえって皆様のお役に立てるよう頑張りたいと思います。常任委員会、常任幹事、編集委員、活動メンバーへの応援をどうぞ宜しくお願い致します。